貴重書紹介

ジョン・ウィーヴァー『古墓誌』（1631）の手沢本

井出（いで）　新（あらた）
（文学部教授）

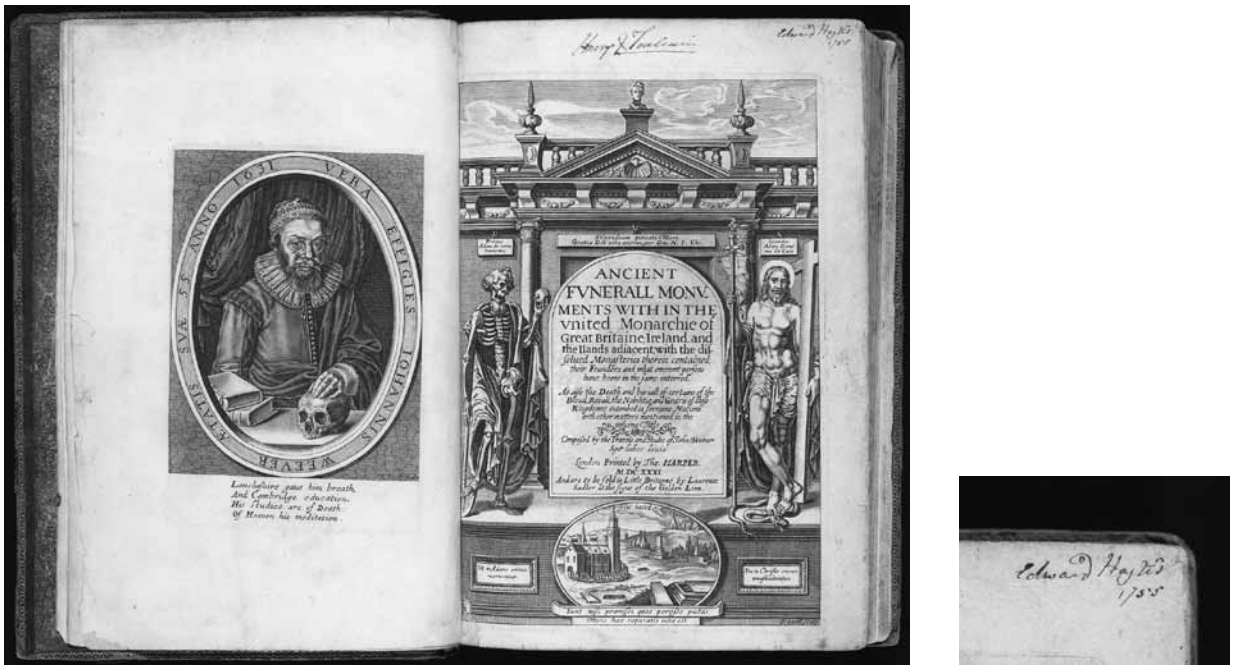

図 1

イギリス初期近代の研究者にとって，この時代の書物が当時の読者にどのように読まれ，さらに後世の読者がその書物をどのように受容していったかということは，非常に興味深い問題である。しかしながらそれを跡づける資料は極めて少ない。かろうじて，本の所有者が代々，書物の余白に残した書き込みや本に綴じ込まれた覚え書きなどがその手懸かりとなろう。例えば近年，世界に残存する1623年出版の『シェイクスピア作品集』（いわゆる「ファースト・フォリオ」）を調査し，それぞれの本の書き込みをすべて記述するという画期的なプロジェクトが行われた。それによって明星大学所蔵のファースト・フォリオが脚光を浴びたことは記憶に新しい。

こうした研究動向は，書き込みや落書きが，稀覯本の価値を下げる「汚穢」ではなく，書物それ自体の来歴や使われ方を物語る「個性」として見なされはじめたことを示している。特に“provenance”（本の来歴）が明確で，誰の書き込みなのか同定できる“association copy”（手沢本）は，世界にひとつしか存在しない「個性」を帯びる。だからこそ稀有な研究対象にもなり得る。もちろんこれは『シェイクスピア作品集』のような高価な本に関してだけではなく，読書行為の有り様を示す様々な時代の書き込みが豊富に含まれている書物一般について言えることである。地層のように積み重ねられた書き込みにより「不完全な本」とされ，これまで敬遠されてきた書物が，実は読書行為を研究するための絶好の史料となるのだ。

慶應義塾が所蔵するジョン・ウィーヴァーの『古墓誌』（初版）は，ウィリアム・シェイクスピアやベン・ジョンソンなど，イギリスの名だたる劇作家たちと交流のあった詩人ウィーヴァーが，古物蒐集家的才能を発揮してイギリス各地を渉猟し，ほとんど現存しない珍しい墓碑を記録した名著である。印刷本のテクスト自体はEarly English Books Onlineで参照可能であるから，テクストを読むためだけな

らば購入する必要はなかろう。しかしながら，慶應義塾の所蔵本には，綴じ込まれた膨大な手書きの注釈ゆえに，強烈な個性が宿っている。

遡ることができる最初の所有者はケント州の地方史家で王立協会会員のエドワード・ヘイステッド（1732–1812）。23歳を迎えた1755年に彼は出身地ケント州サットン・アット・ホーンで結婚しているが，同年にこの本を入手している。題扉の右上にはヘイステッドによる所蔵の書き込みが見られる。【図１】不幸なことに1790年代，ヘイステッドは財政的危機に陥り，蔵書売却を余儀なくされ，この書物を友人でロンドン考古協会会員の地誌学者ウィリアム・ボーイズ（1735–1803）に譲渡する。学問的関心をヘイステッドと共有するボーイズは，仕事上のアドバイザーとしてヘイステッドを助けていたが，貴重な蔵書がオークションで安く買い叩かれるのを嫌い，ヘイステッドの希望額に沿った形で，この書物を含む何冊かを購入し，引き取ったのだろう。

ヘイステッド（そして書物自体）にとってボーイズが二番目の所有者となったことは幸運だった。ボーイズはケント州の墓碑に関する新情報の膨大な注釈やスケッチ【図２】，そしてカンタベリー主教区に特化した地名索引を別紙に書き記してウィーヴァーの調査を補完し，その20葉からなる手書き原稿をウィーヴァーの印刷本と合本したのだった。つまり18世紀の歴史家が，17世紀の古物蒐集家ウィーヴァーの歴史書をどう読み，どんなパラテクストを形成したか，それをこの所蔵本は跡づけてくれる。

その後，この書物は競馬の馬主として有名な蔵書家のジョセフ・ヘンリー・ホーリー（1813–75），そしてセント・オールバンス市長を務めた法廷弁護士のヘンリー・ジョセフ・トゥールミン（1837–1926）へと受け継がれたことが蔵書票からうかがえる。強い個性を持つこのような種類の手沢本は，これからの書物研究，ひいてはイギリス文化史研究において，史料としての価値をますます高めるに違いない。

請求番号［120X@1354@1］

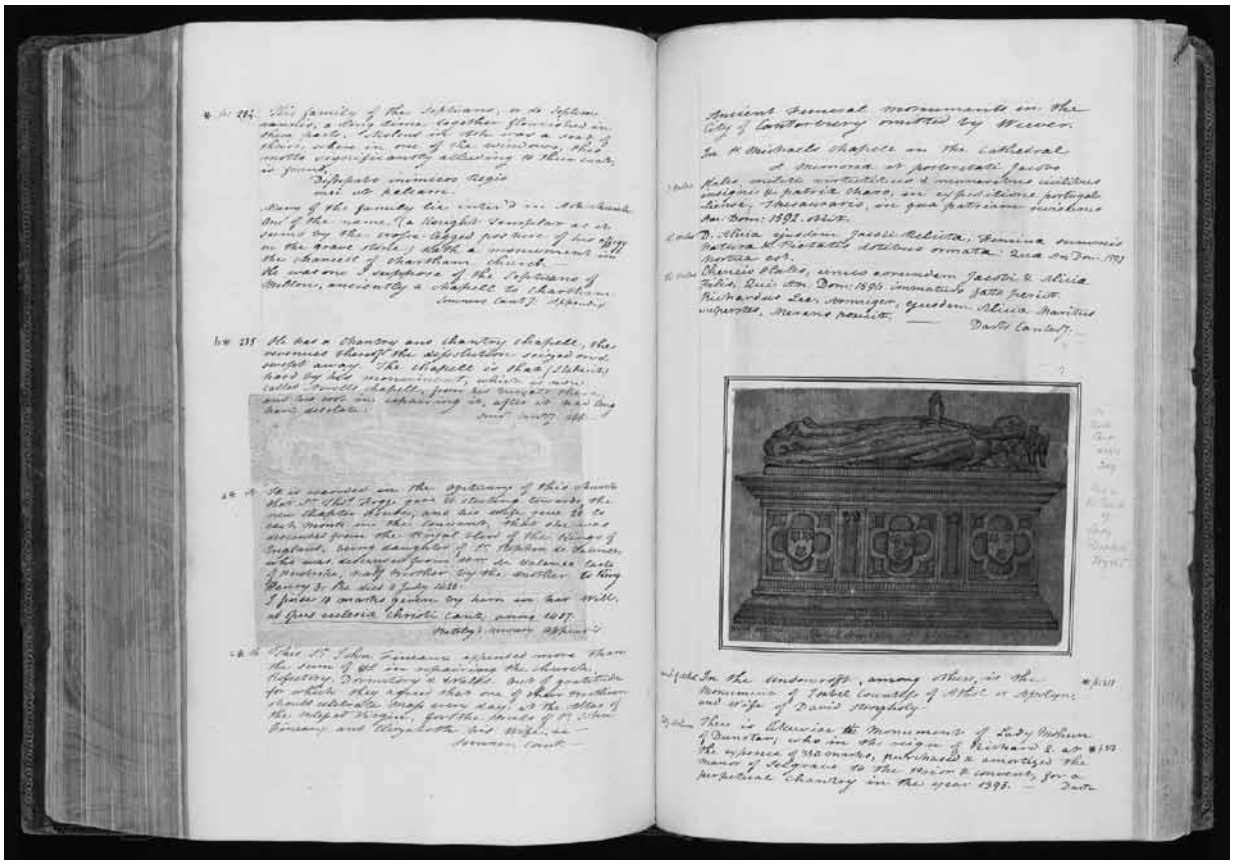

図２